

ゴミ、捨てんなよ!



地域と関係人口のつながりの創出



観光以上、移住未満の第三の人口!「関係人口」のあれこれを一冊にまとめました!

別冊 ソトコト

合本

観光以上、移住未満。

2019
年度版

関係

人口

入門

新登場!

ソトコト Online

sotokoto-online.jp



アクセスは
こちらから ▶



1620YEN

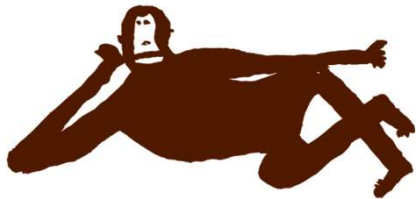
2019年6月5日発行 MADURO7月号増刊

人気の2冊が
1冊に!

Think Local, Think People

ちやのきエンデューロ

ゴミ、捨てんなよ!











北イタリアで Raffy ラッフィ
 ☆ に教えてきた
 チーズたち
 ロンバルディア

Caprino
 カプリノー

さっぱり
 フレッシュ

Crosta fiorita
 フロスタフィオーリタ

とろりと
 濃厚

formaggella
 フォルマジエッラ

もちり
 セミハード

Ricotta
 リコッタ

ほん
 ち



DRINK MENU
 ・オーガニックコー
 HOT / IC
 ・富士町産本紅茶
 HOT / IC
 ・ビール 5,500円

Today's Menu
 本日の食事メニュー
 A テリプレート
 ち肉のクrostata
 ・サレソッチャ、カプリ
 フラベリー、セミ
 ・じゃがいもの冷
 ・とうもろこし、フ
 ・かぼちゃ、トマト

お会計



Rubbermaid

(6) THERMAL JUG
HALF GALLON

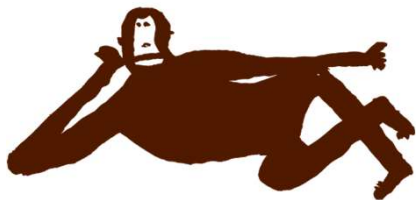
CARIBOU
Barbecue Range

カリブー バーベキュー
No. M-7836

CAPTAIN STAG

梅守志歩さんの、大切な村と宿

ゴミ、捨てんなよ!



家族を助けたいと、
がむしゃらに働いた。

奈良県奈良市に拠点を持つ「梅守本店」の取締役で、1988年生まれの梅守志歩さん。社名から分かるように、同社は家業。1994年、父・康之さんと母・節子さんが創業した寿司製造・販売の会社だ。

奈良市で生まれ育った志歩さんは京都の大学を卒業後、不動産IT企業の「ネクスト」(現・LIFULL)に就職し、大阪の都心部で営業担当に。ヒール靴姿でバリバリと働き、その仕事を続けたかったが、康之さんから「3年で辞めて帰ってきてほしい」と告げられていた。

実は、志歩さんは四姉妹の三女で、長女の姉は心の病を、妹は白血病を患っている。「長女の姉と妹の状態はよくなかったし、次女の姉はすでに結婚していたから、私しかないと思ってきたから、帰さないでよか(笑)」。

「梅守本店」は、父の寿司事業と祖父が経営していた不動産事業を合併させて新たにスタートした会社です。祖父に父が「何かあれば、不動産事業を父がやらねばならず、寿司事業の責任者がいなくなってしまう。自分のやりたいことを続けるか、家族

特集
未来をつくる
働き方図鑑
Creative work for
the future

当たり前前である
場所をつくる。

梅守志歩さんの、
大切な村と宿。

与えられた境遇で、望まれた役割を成し遂げながら
自分がやりたいことにも結びつけて働く。

そんなしなやかな働き方を始めたのが、梅守志歩さん。

「大好きな人たちと自分のため」2つの事業に関わっています。

photographs by Yuta Togo text by Yoshino Kokubo

に求められていることを選ぶか
……、すごく悩んで、私は家族
のほうを選択したんです」

2013年、「梅守本店」に
入社した志歩さん。ここから、
苦しい日々が始まった。「前職
では数千万円規模の仕事に関わ
っていたのに、直営の販売店で
一日10万円ほどを稼ぐ日々。そ
のギャップに「私はこんなはず

るために帰ってきたんじゃない
ー」と思っていました」スト
レスからか体に蕁麻疹がで、
何度も両親に辞意を伝えたこと
もあったが、康之さんは首を縦
に振らなかった。

「あのとき止めてくれたから
こそ、今の生き方になど着け
ました」と振り返る志歩さん。
その頃康之さんは、寿司職人を

奈良県・山添村。
この美しい地域で、
素敵なローカル
プロジェクトが進行中！

崖の麓に立つ梅
守志歩さん。背後
にはなまたま懸丈
られていた「梅」の
木が、シンボルツ
リーになりそうだ。

建設中の街から
の眺め。山々に響
け渡る静かな
の人々の生活を、
体感することも
できる。



茶畑見学などを盛り込んだツアーの様子。外国人ともすぐに親しめるのが、志歩さんの魅力の一つ。



山添村は奈良市から車で約30分。アクセスがよく、自然も豊かで、夏季でも夜間は涼しい。



食の体験をする予定のカウンタースペース。ここで国内外のたちが寿司を撮る日は近いだろう。



「中まと観光推進協議会」で受け入れている民泊の宿泊客と、「地域のみなさんのご協力」があって成り立っています。



親しくしている志禮家のみなさんと、志歩さんのことを「私たちに与ってのマンナ」と表現！



のどかな田園風景に心が癒される。昔「ume」の詳しい情報は公式サイト(<https://ume-yamazoe.life>)を参照。



日本茶に関心の高い外国人ツアー客からは、茶葉や栽培などについて熱心な質問をされることも。



仕事のほかに、奈良市内の高校生の農業体験の受け入れなども手伝っている志歩さん。とてもアクティブ！



雑居中の客室。一様質しをする予定で、宿泊客は気兼ねなく滞在することができる。



備の採用スペースの敷地（雑居中）。全面がガラスで、明るい空間に。

農家の志禮紀子さんと。活動を応援してくれる、地域の心強い存在。

おしゃやかな空間と、
村の人たちが行き来する
交流の時間と。



今の私にできる 働き方って、何だろう？

2015年、ある働き方との
出会いで志歩さんの心境が変化
し始める。県内の東吉野村にオ
ープンしたシェアオフィス「O
FICE CAMP HIGASHIYOSH

体験できる「うめり寿司学
校」を始めていた。当初は日本
人客を想定していたが、末娘が
入院する小児がん病棟で「娘が
なものを食べることを楽しみに
している子どもたち」に触れた
ことが康之さんを揺さぶったの
だという。その経験こそが同社
の方向性を決定づけ「国籍、人
種、宗教、障害、病気にとらわ
れず、すべての人が食を通して
笑顔で楽しい場をもつこと」が
ミッションになったのだ。「梅
守本店」の客には奈良を訪れる
外国人観光客が多く、彼らに対
象にするのは自然な流れだった。
康之さんは、営業の得意な志
歩さんを頼りにしていたのだろ
う。志歩さんは企画書をつくっ
て海外を飛び回り、ミッション
や思いを熱心に伝え、旅行会社
から団体客の申し込みをどんと
ん得ていった。現在は東南アジ
ア、ヨーロッパ、北米、ロシア
などから客が訪れ、参加者は40
万人を突破している。

「私は営業くらいしかできな
いけれど、自分の今のリソース
で自分のやりたいことに合わせ
て、できることをする。そう考
えて、変えたら、少しずつ楽し
くなってきたんです。奈良市
の本社に通いやすく自然が豊か
な土地に拠点を持ち、仕事をし
ながら新しい活動ができなにか。
そう考え、「寿司づくり」に使
うさび葉の生産地で知人もい
る山添村にしよう」と決断。空き
家を探し回ってシェアハウスと
して住み始めた。

その頃、会社側にも再び転機
がやってきた。2016年度の

「O」で、村に移住したデザイ
ナー・菅野大門さんから「拾っ
た流木をフリーマーケットで販
売した」と聞いたのだ。「会社
に入ってしまうと、会社員以外
の生き方にもあまり出会えませ
ん。私には、自分の身近にあるもの
に自分で価値を付けてお金を得
られるんだと衝撃で（笑）。自然
あふれる自分の好きな環境で好
きなものを取り扱いたくから生き
ていけると教えてもらったんで
す」と志歩さん。アラスカを撮
り続けた写真家・星野道夫さん
の本を読んで以来、「自然の近
くで暮らしたい」と考えていた
こともあり、菅野さんの働き方
に強く惹かれたのだ。

「O」で、村に移住したデザイ
ナー・菅野大門さんから「拾っ
た流木をフリーマーケットで販
売した」と聞いたのだ。「会社
に入ってしまうと、会社員以外
の生き方にもあまり出会えませ
ん。私には、自分の身近にあるもの
に自分で価値を付けてお金を得
られるんだと衝撃で（笑）。自然
あふれる自分の好きな環境で好
きなものを取り扱いたくから生き
ていけると教えてもらったんで
す」と志歩さん。アラスカを撮
り続けた写真家・星野道夫さん
の本を読んで以来、「自然の近
くで暮らしたい」と考えていた
こともあり、菅野さんの働き方
に強く惹かれたのだ。



梅守志歩さん
「梅守本店」
取締役

働いている時間
22:00
WORKING TIME
18:30
勤務時間

年間の休日日数は?
50日

365日
仕事と休日の区切りが難しいので、日数で表すづらいですね。

収入は?
年収で500万円くらいです。はじめに営業を頑張って収益構造をつくれたからこそ、今新事業もできるのだと思っています。

やりがいを感じるのとはどんなとき?
地域の人たちが観光プロジェクトを喜んでくれて、彼らの日常が少し「色づく」のを感じると嬉しいです。

志歩さんと恵歩さんの働き方で活躍する山添村のみならず、近頃かけ合いやサポートし合う大切な仲間。

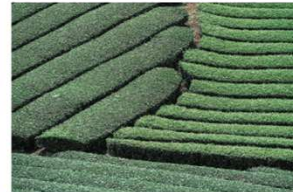
新しい宿から、「生きる楽しさ」という価値観を醸成する。



前職を辞める頃に読んだ、星野道夫さんの本や写真集。「朝」に入れば持ち歩いていただくと、星野さんの世界観が好きです。



お茶園「大和園」で働く森浦浩希さんと。ツアー客には、森浦さんたちがお茶の説明をしています。



村内のお茶園「大和園」の茶畑。「やぶきた」や「おくひかり」という品種のお茶の木が育てられている。



志歩さんたちが住むシェアハウスは、村内の立派な一軒家！地域のの人たちとホームパーティを聞くことも多い。



シェアメイトの菅原優子さんと。「私にとって、エバちゃん(菅原さん)のサポートが本当に大きいんです。



観光の新事業は始まったばかり。志歩さんは、寿司商品を百貨店や海外に販売するため営業にも奔走している。



「梅守本店」の商品の一つ「手鞠わさび壽司」。「梅守本店」は現在、寿司販売の直営店や寿司学校など10店舗を運営。



自宅の志歩さんの部屋のディスプレイ。志歩さんにとって大切な小物やお茶などが飾られている。

農林水産省の「近畿の食と農インバウンド優良表彰における近畿農政局長賞」などを受賞したことで、同省が公認している「農山漁村振興交付金(農泊推進対策)」を知ったのだ。しかし、締め切りはわずか約2週間後だった。「その頃、地域に住むおじいさんやおばあさんの日常が楽しかったらいいな、彼らの知恵が伝承されたい」と思っていた、農家民泊を企画したいと思っていた。中山間地域が生き残るには、あるものを活かして経済が回る仕組みをつくる必要がある。人と自然が調和している山添村の暮らしに価値を感じる人はいるはずだし、私は観光で産産をつくることならできると。

志歩さんはそのアイデアを、会社の新事業としてスタートすることに。営業の実績もあり、ミッションにも沿っていたことから、康之さんも承諾した。志歩さんは村に掛け合い、徹夜で資料をつくり、村と「梅守本店」などで構成される「やまど観光推進協議会」を発足させ、ギリギリでそれを提出。無事、2017年に採択された。

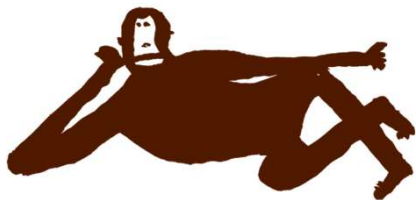
こうして協議会が、外国人観光客を迎える民泊プロジェクトを2018年からスタート。宿泊の受け入れ先探しでは、シェア

「予想以上に楽し」「収入にもなる」と大好評。2020年には16回も開催される予定だ。志歩さんは今、寿司事業の営業と観光事業を兼務し、民泊やツアーのアテンドも行っている。

さらに「梅守本店」で進行中のプロジェクトが、村内で建設中の宿「umid」だ。客は村の環境に身を委ねてのんびりしながら、寿司や郷土料理などの食の体験ができ、村の人はふらっと立ち寄れる。志歩さんは単なる宿泊の場づくりではなく、会社のミッション同様、優しい世界を見つめている。「どんな人もそのまゝの状態でも満たされ、自分の日常や人生を楽しく感じられる場や、そういう価値観を醸成していきたいんです。」宿は10月にオープン予定です。

『イワシビル』に込めた思い

ゴミ、捨てんなよ!



旅と時間を、ここ阿久根市から編集する。 『イワシビル』に込めた思い。



鹿児島県阿久根市の水産会社の常務取締役・下園正博さんがつづけた、カフェやショップ、工場、ホステルを備える「イワシビル」。販売する自社商品の開発では、社員自らが生産者に取材し、阿久根らしさにこだわった「旅と時間」を届けている。名前も中身もユニークな「イワシビル」を体験しました!

photographs by Hiroshi Takaoka text by Kentaro Matsui

特集
地域で生かす、編集力
skills of local editing

「イワシビル」の最寄りの阿久根駅、高橋列車「ななつ星」で知られる水戸岡敏治さんのデザイン。

「何かやれ」と、父に託された1棟のビル。

最近、丸干しを食べましたか？
「そう言えば、食べていない」という方は、「イワシビル」で販売している「旅する丸干し」を食べしてほしい。洋風に味つけた丸干しの、おいしさと新しさに驚くでしょうから。

鹿児島県阿久根市は、昔から丸干しの原料となるイワシの産地だ。その海沿いの地区で80年ほど前、サバやイワシの加工販売を始めたのが下園正博さんの祖父・薩男さんだ。水産会社「下園薩男商店」として父親の満さんが受け継ぎ、今は主に量販店に丸干しを卸す商売を営んでいる。下園さんはその3代目。常務取締役を務めているが、ある日、社長の満さんから、「正博、ビルを買おうと思うが」と告げられた。

「どうだ？ 安いらいぞ？」
「ビルなんか、何に使うの？」

下園さんは反対した。「旅する丸干し」という「下園薩男商店」にはない新商品を開発し、それを販売するカフェ&ショップを海が見える丘につくろうと計画していたからだ。「そのための資金に取っておいてほしい」と頼んだが、満さんはビルを購入。「何かやれ」と下園さんに託した。「魚を扱うあの世代の大人は、買いたどと直感したら迷わず買います。魚の値は取極量に左右され、今日と明日で何倍も変動することがありますから。それでビルも」と苦笑いを浮かべる。

突然手に入った、築約50年の3階建てのビル。市の中心ではあるが、シャッター通りと化した商店街の端っこに位置するこのビルで、どんなビジネスを行えば収益を出せるのか、



鹿児島県阿久根市の中心地にある3階建てのビル。こちらが「イワシビル」です！

「イワシビル」で、阿久根らしさを味わってください！

下園薩男商店
常務取締役の
下園正博さん

「イワシビル」で自社商品を製造し、地域の人や旅行者を迎えるスタッフの皆さん。女子率が高い！



1階はカフェ&ショップ。阿久根や鹿児島県の素材を使った自社商品やセレクト商品を販売。商品の棚は干物の台をリメイクしたもの。

1F cafe & shop
阿久根にこだわった特産品から、「港町のたい焼き」まで!



港町のたい焼き〜塩クリーム添え〜

地域の人が来店しやすいようにと、たい焼きを売ることに。阿久根は餅もよく売れる。丸干しの加工に使うがりに入りの塩を使った塩クリームをつけながら食べれば、餅の旨みが引き立つ!

イワシビルランチA

前職はイタリア料理店のシェフだった工場長の犬養樹さんが前よりをかけてつくったスパゲティ。ピリッとスパイシーな「旅する丸干し」南イタリア風」を添えて和えている。



ボンタンの木 カuttingボード

木の器が好きで女性社員が農家を取材中、ボンタン栽培で開いた木は素材として使われていると聞いてもったいないと感じ、Cuttingボードを開発。鹿児島県の木工作家に製作を依頼。



鹿児島醤油

創業明治43年(1910年)の阿久根の老舗「佐賀屋醸造」とコラボしてつくった醤油。九州の醤油は甘いことで知られているが、食品添加物で甘くしていることも多い。こちらは安全、添加物不使用の甘さ。



旅する丸干し

「イワシビル」の主商品。若い人にも丸干しを食べてもらおうと、オイルサーディンに、早朝4時から6時に獲れる、エサを食べていないイワシを使用。だから、はらわたの苦みが少ない。ポップなデザインで味は4種類。



イワシビルランチB

豚肉にはショップで販売する「梅生醤油」をベースにした特製タレをかけて、「石元厚平醤油」のおおさの味噌汁や「まなべみかん園」のゴボコンど阿久根や鹿児島県産の素材を使用。

Kots(コッツ)

小魚とナッツをミックスしたグラノーラ。工場の製造スタッフ3年目の中野沙也加さんが、大好きなアーティストイメージして開発した。栄養士の資格を生かして、体にもいい商品になっている。



焼ウルメ丸干し

「旅する丸干し」を食べた若い人から、「本来の丸干しを食べてみたい」というリクエストをもらったことから開発。パッケージを変えて常温商品に仕上げた。「丸干しの再編集です」と下園さん。

『イワシビル』の見学を開始!



①「イワシビル」を運営する水産会社「下園産男商店」の常務取締役・下園正博さん。阿久根に生まれ育ち、東京のウェブデザイン会社などに勤め、Uターン。②「イワシビル」のリノベーションやデザインに携わった石川秀和さんと建築師橋本さん。③以前は生命保険会社のビルだった「イワシビル」。④ショップカードもイワシ!



ショップ、カフェ、工場にホステル!人が集まる場所を編み出していく。

また、地域のためになれるのか。下園さんは常務として熟考した。「下園産男商店」は丸干し屋。でも30年後、世間で丸干しが食べられていかはわからない。丸干し屋の伝統を生かしながら未来をつくらなければならぬ。と悩んだ末に頭をよぎったのが、「今あるコトに一手間加え、それを誇り楽しむ、人生を豊かにする」という自社の企業理念だった。「東京を真似たおしゃべりな空間や商品をつくっても東京には敵わない。自分たちの強みは、東京が真似できない地域に根ざした伝統や食文化。阿久根にあるものを一手間加え、世界に通用するものを自分たちの手でつくる。そういうビジネスをこのビルで始めたい」と、下園さんは企業理念を道標にして歩むべ

き方向を見出した。生まれ育った阿久根や鹿児島県にこだわったカフェ&ショップを1階につくり、2階に工場を併設した。さらに、阿久根には宿泊施設がほとんどないことに気づいた下園さんは、主力商品とする「旅する丸干し」も旅がキーワードだったことから、「ホステル」をコンセプトに据えた。「旅と時間」をコンセプトに据えた1・2・3階のこの組み合わせはユニークかとも思っ「と早速、設計や空間づくりに取りかかった。サポートしてくれたのは、当時、地域おこし協力隊として京都から移住した石川秀和さん。京都でリノベーションの会社を経営していた場づくりのプロだ。「今ある空間を再編集し、新たな価値を創造するのが

ノベーション。地域の特産品づくりも同じスキームで行えます。つまり、このビルのリノベーションは、歴史ある丸干し屋さんがつくった新商品「旅する丸干し」を基点に展開すればうまくいくと確信できたのです!

と言う石川さんと下園さんは話し合いを重ね、港町・阿久根に拠って立つデザインをちりばめながら、「何かやれ」と父親に託された「イワシビル」を完成させ、2017年9月にオープンした。

商品開発を通して、地域の魅力を編集する。「イワシビル」の注目すべき点は商品開発力にある。「下園産男商店」の仕事で試食販売を行った下園

さんが、スーパーの売り場で「若い人は丸干しなんて見向きもしない」と痛感させられた経験から開発し、13年に発売した「旅する丸干し」が商品開発の始まりだ。その後、次々と開発された自社商品が1階のショッ

Shimozono's Voice
これまでに僕が得た商品開発の知識やノウハウをスタッフに伝える。商品開発講座も行っていきます!

Shimozono's Voice
時代に合わせて編集しなおすことで盛り出すものもあります。そういうものが地域に届いてほしい!



ラウンジのソファカバーは海がモチーフ。青い生地は大漁旗を染める阿久根の「アキノ染色工芸」で染め、産直さんたちが縫製した。

3F

hostel
心地よく過ごせるホステル。
阿久根らしさに癒される!



●朝食には阿久根産の丸干し! ●商品の「まるさつぷん」を揚げたゴロウさんがトイレの壁にもイラストを。●部屋は7畳。なぐり加工の床が柔道に気持ちいい。●壁を飾る産直さんのアート作品。●地元の中学校の机と椅子を再利用。●鏡の枠は魚を入れるトコ箱。●鹿児島でイベント「ココカラカイギ」を開催する高橋空穂さん(左)らも宿泊。

Staff's voice

『イワシビル』スタッフ
洲崎千秋さん

ホステルの運営は鎌倉の
『Hostel YUIGAHAMA』で
作業して教わりました。
朝食、おいしいですよ!



Shimozono's voice

ラウンジの本棚は「旅と時間」をテーマに構成。鹿児島の旅する本屋「つぼみ文庫」さんに選んでもらった本も!

「今あるコトに二手間加える」。
下園さんたちがつくる、豊かな暮らし。



『イワシビル』を切り盛りする奥さんの貞代子さんととのツーショット。工場の見学通路で。

Area>>> 鹿児島県阿久根市

『下園産 男商店』常務取締役
下園 正博さん
Masahiro Shimozono

Question
下園さんに関する編集者のモットー。

どうやって編む? ●東京にはない阿久根品の開発は、生産者として、『下園産 男商店』の企業理念に合致したこだわりや思いを商品づくりに反映しています。

どうやって集める? ●ショップで販売する商品の開発は、生産者取材することからスタートしています。生産者のこだわりや思いを商品づくりに反映しています。

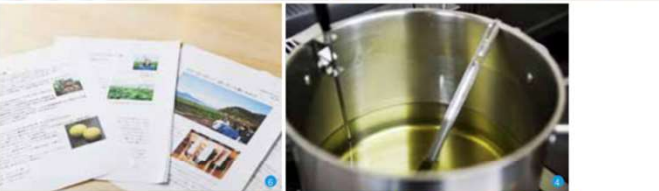
Information
イワシビル/鹿児島県阿久根市鶴見町76
tel.0996-73-3104
www.iwashibld.jp

「まれるでしょうから」と下園さん。同時に、工場を見学するお客さんにとっては商品や地域への愛着を持つ機会となり、都会へ出たがる地元の中・高校生には、阿久根に残って夢を持って働いてほしいという期待も込めて設けたそうだ。「人口数十万人のまちを動かすのは無理ですが、2万人ほどのまちなら小さな風を送り込むことはできそうな気がします。これからも阿久根の魅力を掘り起こし、阿久根を旅する人に喜ばれる『イワシビル』に育てていければ」と下園さんは笑顔で語った。

「今あるコトに二手間加える」。
下園さんたちがつくる、豊かな暮らし。

生産者さんの思いなどを聞き、写真撮り、レポートとしてまとめます。生産者さんのこだわりに感動し、その思いに共感する心を育むことで、どんな商品をつくり、どんなふうに見えるのか、取材した内容を踏まえた各々が探っていくのです。また、工場のスタッフは製造だけでなく、カフェ&ショップの接客も担当する。お客さんから直接、食べたい商品をつくらうという気概も生

2F Factory
ショップで販売する自社製品は、
2階の工場で作っています!



Staff's voice
『イワシビル』スタッフ
中野沙也伽さん

商品開発がたくて入社しました。
「Kots」は私の代表作です。
次はどんな商品を開発しようかな!

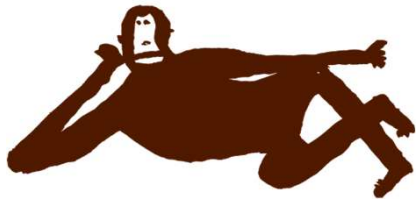
●2階の工場では、工場長の大園さんのもとで20代の女性スタッフが自社製品をつくらう。この日は、「旅するイワシ」の瓶詰の作業。●工場には見学通路が設けられ、買い物客や旅行者が自由に見学できる。●阿久根で獲れた最上級のイワシを使用。●冷蔵庫でも固まりにくい菜種油に漬けて、瓶詰め完了! ●商品開発のために生産者取材した社員のレポート。

Shimozono's voice

僕らが子どもの頃には給食に丸干しが出ていたけど、今は出ていないみたい。子どもたちにも丸干しのよさを伝えたい!

社会を動かすペンターン女子!

ゴミ、捨てんなよ!



宮城県・唐桑半島が元気です。 社会を動かす ペンターン女子!

あたらしい価値観を持って地方へ移住し、
そこで始まった人生を楽しんでいる女子チームを紹介。
でも、ユニットチームなのではなくて、
まだまだ移住者を募集しているそうですよ!

photographs by Masaya Tanaka text by Yoshino Kokubo



宮城県の東北東端に位置する唐桑半島。リアス式海岸特有の美しい景色をもつ。

陸地からつららるように細く延びた、唐桑半島と呼ばれる宮城県気仙沼市唐桑町。市内で最も太平洋側に突き出ているため、3・11で甚大な被害を受けたところでもある。

しかし、この小さな半島で、あたらしい移住のカタチが始まっている。3・11からの約5年で、唐桑半島へ移住した人は15人ほどになった。なかでも、若者によるまちづくりサークル「からくわ丸」に携わっている移住者が9人。彼らは、半島に移住することを「ペンターン」と命名

した。「ペン」は、半島を意味する「Peninsula」から。9人のうち、5人が女子で「ペンターン女子」と呼ばれるようになった。

そのリーダー・根岸えまさんは、取材にもんべ姿で登場し、「地元のおばあちゃんが作ってくれたんです。一番のお気に入りです」と話し、「このもんべに、ニット帽とデニムシャツ、ムートンブーツを合わせているところがポイントだよ」と、他のメンバーと笑った。とにかく明るく、笑いの絶えない5人だ。

増やしたい、この町のために頑張る人がもっと増えたら」と。根岸さんはこれを機に、2012年に大学を休学し、1年唐桑半島に滞在。「からくわ丸」などの活動に没頭した。その後、復学するときには「東京に戻るのとはつらかったけれど、もっと勉強したいという気持ちが芽生えていた」という根岸さん。生産者の顔を知ったことで一次産業に興味を持ち、あるNPOでインターンを経験した。その母体企業から就職の誘いも受けたが、唐桑半島へ戻りたい気持ちが強くなり、2015年3月に大学を卒業し、ついに4月に移住した。

根岸さんが初めて唐桑半島を訪れたのは、2011年10月、大学2年生のときのこと。「唐桑町内のある地区の運動会にお手伝いとして参加するボランティアでした。私は東京生まれ、東京育ちで、それまで地方に行ったことがなかったんです。集まった地元70〜80人が大家族のようで、人と人の距離が近いので驚きました。」

その後、根岸さんに衝撃的な出会いがあった。「地元」の漁師さんから、震災の話が直接聞くことができたんです。津波が来る前に船を沖へ出す「沖出し」をしてその方は助かったのですが、行方不明になってしまった漁師さんもいたことや、荒れ果てた町で人から裏切られるようなことがあり絶望したことを、涙ながらに語ってくださいました。それでもなぜ漁師を続けているのかを聞くと、「ずっと漁師として生きてきたから、自分が漁師として先頭に立ってこの地域をどうにかしたい」と、圧倒的な使命感を持っていました。どんな嵐から這い上がる人の強さを感じましたし、命と引き換えに仕事をしている人のすごさに価値観が一気に変わったんです。こういう方をもっと

ペンターンのペンは、ペニンシユラから。つまり、「半島移住」のことです!

増やしたい、この町のために頑張る人がもっと増えたら」と。根岸さんはこれを機に、2012年に大学を休学し、1年唐桑半島に滞在。「からくわ丸」などの活動に没頭した。その後、復学するときには「東京に戻るのとはつらかったけれど、もっと勉強したいという気持ちが芽生えていた」という根岸さん。生産者の顔を知ったことで一次産業に興味を持ち、あるNPOでインターンを経験した。その母体企業から就職の誘いも受けたが、唐桑半島へ戻りたい気持ちが強くなり、2015年3月に大学を卒業し、ついに4月に移住した。

佐々木美穂さんは、いち早く唐桑半島へ入ったメンバー。当時は兵庫に住む大学1年生。ハンセン病に関する海外でのボランティア活動をしていて、唐桑半島に著名なハンセン病の元・患者がいたことでこの町を知っていたため、2011年3月にボランティアとして入った。通ううち、居心地のよさに移住を意欲するようになり、2015年3月に大学を卒業し、4月に移住した。「実はマスクミミ志望で内定もいたいたんですが、縁もゆかりもない東京での生活を考えたら、同じ志をもつ仲間

小間さん
根岸さん
内田さん
佐々木さん
根岸さん

唐桑らしい風景のひとつです!





唐桑半島から、湾にある大島を望む5人。周には、社員やホタテを養殖している民が溢れている。



「半島は三方を海に囲まれていて防衛的な部分はあるんですが、入ってしまえば逃げ込みやすいですよ」と、楓岸さん。

知り合いの漁師さんと立ち話中。



右 / 社員小園「自費養殖」のグッズにて、買ったおしゃべりしたり、元氣な5人！ 左 / 楓岸さんを見つめ、車を止めた漁師さん。楓岸さんは町の人気者！



3人がシェアして住んでいる唐桑半島の玄関先。「清水屋」とは、ここにもともと住んでいた漁師の屋号。

訪れたところ、地元の人から「この間も来ていた学生でしょ」と言われ、「2回目なのに覚えていてくれたんだ」と感動したという。

「名前と顔覚えてもらえて嬉しいけど、こんなふうにはしゃいだら、忘れられたくないし、また行こう！」と奈良から通い、始めましたね。来る度に「お

移住の決意は、5人それぞれ。震災のボランティアや漁師との出会いを経て、この土地に縁を感じていきました。

を卒業した直後の2013年4月に移住した。「高校教諭を目指していましたが、社会経験がないと高校生に何も伝えられないと思っていたので、大学を卒業してすぐ教員になることが私にはしっくりこなかったんです。たまたま唐桑というチャンスがあって、迷うことなく飛び込みました」

奈良県出身の内田祐生さんも、ボランティアとして2011年9月に唐桑半島を初めて訪れた。10月にも

がいた唐桑のほうがいいと思っただけに来ました」。

岡山県出身の岡崎真弓さんは、2011年10月にボランティアとして初めて唐桑半島を訪れた。翌年、根岸さんの誘いで再び訪れ、地元の人とヨソモノが一瞬に町を歩いて地域の魅力を発掘する「まちあるき」に参加し、「ないものねだりじゃなく、あるものを使って町を盛り上げる精神に惹かれて」移住を決意。目指していた教職にすぐには就かず、大学

3人は、唐桑の漁師が住んでいた唐桑御殿と呼ばれる古民家でシェアハウス中。表札は元・漁師さんがつくってくれたそう。





遷居の宴会の
酒盛り明です。

「唐桑出張司」という頃に合せて踊る唐澤さん。地元のおばあさんたちとかが月練習したそう!



小町さんと、この地で栽培されている丸唐桑や唐桑の美りジャムの販売をしている丸唐桑栽培愛好会の皆さん。



フォトドキュメント
唐桑ごっつおーフェアの
にぎやかな一日!



フェアでは、夏越祭で選れた新鮮なイカの丸焼きも販売。潮力があり、やわらかくて美味!



畑の計画について
相談中……!?

「からくわ丸」では子どもたちと猪づくりも行っている。その先生、三浦茂さんと話す。岡崎さんと小町さん。



地域のみんと
仲良しです!

地元の小・中学生とも仲良しの内田さん。友達のように暮わられ、内田さんも親しげに話す姿が印象的だった。



選れたての魚介類を食べるのは、地元の人々にとって日常のこと。フェアではメカジキなどが売られていた。



家は、りんごが特産品の気仙沼。雪が入っていて、気仙沼のりんごはおいしいんですよ」と岡崎さん。



さんま味噌も
美味ですすめ!

さんま味噌の販売を行っている移住者の知人と談笑する岡崎さん。移住者どうしの情報交換も貴重。

「移住しない?」の誘いを受けて。



小町 香織さん

富山県出身。「ペンターン女子」で一帯番員メンバー。岡崎さんが始めた地域支援員の後任として着任。「[からくわ丸]のように地元と移住者をつなぐ場があると地域に入りやすい」と話す。

子どもとも仲良しです!



内田 栂生さん

奈良県出身。「ペンターン女子」のムードメーカー。子どもを月に一度一泊一食キャンプに連れて行くボランティア活動などで唐桑半島に選られた後、移住。現在は市の嘱託員として働いている。

移住者仲間を増やしたい!



佐々木 実穂さん

兵庫県出身。関伏や木質バイオマスを扱う企業に所属する。林業女子でもある。地方の仕事の良さを「自分の仕事はどう。誰につながっていくか、その先の顔が見える仕組みがある」と話す。

「ペンターン」募集中です!



横俣 まみさん

東京都出身。「ペンターン女子」リーダー。「からくわ丸」の創立メンバーでもあり。現在は一般社団法人「まるおフィス」で働き、まちづくりや漁師のブランディングプロジェクトに関わる。

ヨソモノ視点で新鮮な価値観を。



山崎 真弓さん

岡山県出身。「ペンターン女子」の最年長者で、優しいお姉さんのような存在。唐桑半島へ移住後、地域支援員を2年経験。教育に興味を持ち、2015年4月から唐桑町内の小学校の支援員に。

唐桑の魅力は?
ペンターン女子の
キャラクターをご紹介します!

気仙沼、そして唐桑に遊びに来てね!



息がぴったり合ったペンターン女子。とびきりの笑顔が地域を明るくします!

かえり」と言ってもらえました!」

唐桑半島で仕事が見つかったことで、大学を卒業してすぐ、2014年5月に移住した。

仙台にある大学に通っていた小町香織さんの初。唐桑は、2014年11月。ボランティアではなく、「気仙沼にもっといい漁師さんがいる」と聞いて訪れたのだとか。「実際に会ってみたら、インタレスティングというより、フアンシーのほうのおもしろさで(笑)。地元のおばちゃんたちも話しておもしろく、唐桑っていいなと思ったんです。その日に根岸や岡崎たちと出会い、彼女らが自分の意志で移住を決めて活動していることが衝撃的で、新しい価値観を感じました。自分の好きなように生きていいんだ!。この人たちが活動したら、私も自分の意志で活動できるようになるかもしれない。」

と。運良く仕事が見つかり、「移住しない?」という誘いにも、不思議と抵抗感がありませんでした。

「その1つは耕種で唐桑半島に集まった「ペンターン女子」は、今や地域で注目され、特に年配者から親しまれる存在に。さらに彼女たちには、



記者の目

唐桑は女性が充ちる半島だ。かわいささと明るさ、そして若さを持つ「ペンターン女子」ももちろん。彼女たちの移住ストーリーを「若いからできるんだよ」と言うのではなく、素直に受け取ってもらった。さあ、何をして生きていこうか。

結論
「移住したい」より「どう生きるか」。



上/猪づくりを堪能(左ページ参照)見に来ていたお客さんと話す横俣さんと佐々木さん。下/[からくわ丸]メンバーの鈴木さんご夫婦と岡崎さん。

半島移住の他に共通項がもう一つある。社会人1年目を、唐桑半島で経験しているのだ。既成概念にとらわれず、自分の声に耳をすませて人生

を切り開く姿はほだのほしい。どのメンバーも、ゆかりの地に移住したという意味で「完全な(ルーティン)の「Rターン」でもある新しい縁を感じ、その直感に従って素直に動く彼女たちの行動力は、きっと地域の財産なのだろう。今、着きパワの財源のようにこの半島を走っている。

01 地域 気仙沼市唐桑町

おすすめの特産品は?

A 選を強められる。社福小唄「唐桑南風」の上の湯。震災から唐桑が癒えているのかもしれない。

覚えてくれたのは

ペンターン女子 横俣まみさん

DATA 面積/42.31km² 人口/6935人(唐桑町、2015年11月) 主な業/自治体の職員、土木作業員など 気候 冬寒夏涼(気候変動や秋長) 産業 稲作など www.city.karasuma.lg.jp (気仙沼市)

10.9℃ 24.3m

[HOME](#)

[銭湯 鶴亀の湯](#)

[鶴亀食堂](#)

[オープンまでのこと](#)

[お問い合わせ](#)



食堂と銭湯です。

港町 気仙沼らしさあふれる、

HOME

銭湯 鶴亀の湯

鶴亀食堂

オープンまでのこと

お問い合わせ

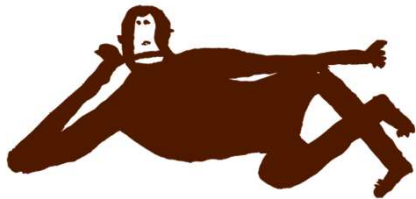


「日本一漁師さんを
大切にすまち」
を目指して



「クスろ」は、
人のつながりを編む

ゴミ、捨てんなよ!



特集
地域の編集術
EDIT LOCAL

故郷を離れた若者たちに「帰りたい」と思ってもらうには、まず、自分たちが街をおもしろがる!!
ダジャレとユーモラスなイラストを添えて「鋼路ならではのプロ」を紹介する「クスろ港」は、笑顔の輪を広げている。

photographs by Hiroshi Takaoka
text by Tomoe Obata illustrations by Kusuro

鋼路で会って、
クスッと笑おう!

『クスろ港』は、
人のつながりを編む。

家業を手伝うため、2012年に札幌から鋼路にUターンした夏堀めぐみさんは、以前より元気がなくなっていた街を見て、問々とした思いを抱えていた。「戻ってきて鋼路の広大な自然、豊かな食、おもしろい人を知るほどに好きになり、恩返ししたい人が増えた。でも、久しぶりに帰省した友達の間から聞くのは「じゃれ鋼路に戻って来たいけど、いまはまだ帰りたい街になっていない」という言葉ばかりだった」と振り返る。

生まれ育った場所をどうにかできないか。救世主が現れたのは2013年9月。帰省した高校時代の同級生の名塚ちひろさんと飲みに行き、「鋼路ってさ〜」と話し出したら、「まらない!」そこから、鋼路と東京を教えきれないメールや電話が行き交った。首都圏で手に入る雑誌「ローカルイベント」の情報、気になったカワイイものを名塚さんが送れば、夏堀さんは地元で出会った「これぞ!」という人やお店の情報を伝え、価値観を共有。名塚さんの帰省時には明け方までの連夜のプレス通が続き、「えー、待ってても変わらないっ

「帰りたい街」にしたい!!
「人」を知れば、地元が好きになるかも。

「帰りたい街」に、いつ、だれが変えるのか。行政? 街のエイメン? 「えー、待ってても変わらないっ



「クスろ港」「クスろ」とは?

「おもしろがる」作戦で、街を元気に!

北海道釧路市で、新たな出会い、アイデア、アクションを生み出し続け、クスッと笑顔で過ごせる元気な街をつくらんと活動する20~30代による市民団体。「街をおもしろがる」ことを信条とし、団体を、クス×鋼路=「クスろ」に、ダジャレやユーモラスなイラスト満載のWebサイトは港町・鋼路をイメージできるよう「クスろ港」と命名。

観光地・鋼路にあって、「人」をフィーチャー。魅力的な地元の人に会うイベントや「ひとめぐりツアー」を通して、鋼路の中の人をつなげ、鋼路を離れた人をつなげ、鋼路と他地域をつなげようと活動中。「ひとめぐり」の記事をまとめたフリーペーパー「ひとめぐり帖」も発行し、北海道、本州で配布している。



上/「ひとめぐり」で紹介したカレー屋さんは、仲間のたまり場になっている。下/常にカメラを持ち、ネタ探しを怠らない。



鋼路の名所「舞鶴橋(ぬさまいぼし)」をバックに、元気いっばいの「クスろ」メンバー。「ひとめぐりTOUR」の赤いフラッグは活動の黒印だ。



国立公園釧路温泉を蛇行する釧路川のカヌーツーリングのファンは多い。運がよければ、周辺にタンチョウやエゾシカに会える。



釧路川の河口を中心に囲がつけられた釧路市。農島神社裏手の河口と海を見下ろす場所は、「クスロ」メンバーのお気に入りの場所だ。

「サーセンキョー! ガーデン」といったイベントを市民有志とのコラボで



時に「クスロ」イベントの会場にもなる「ラーメン屋夏廻り」。国内外からの観光客も多く、ちょっとした「関係案内所」ともなっている。

ストに招き、アウトドアアクッキングと月見酒を楽しんだ。エゾシカハンターを開んだ「百問は一見にシカザナイト」では、エゾシカ肉のローストやマリネ、チョリソを味わい、嗅へのストイックな思いや食肉への考え方を聞いた。そこで「プロ」の話に耳を傾ける参加者の様子をリアルに伝え、笑顔があふれるWebサイトは、磁場になった。「私も参加させてください!!」という温度の高い長文メールが複数舞い込んだ。ひとり、夏廻りさん、夏廻りさん、そして夏廻りさんより3歳年下、釧路町出身で札幌で働く磯優子さん。さらに、街を元気にすることに関心を持つ釧路工業高等専門学校の須藤か志こさん、北海道教育大学釧路校で学ぶ美濃谷日向子さんに加わった。

美濃谷日向子さん



青森市出身。釧路市在住。北海道教育大学釧路校に在学中。「釧路が何かやることがないかな」と思っていたところ、社会教育課の探検でゲストスピーカーとして登壇した夏廻りさんのパワフルな活動聞き、「クスロ」への参加を決定。「頼りになるお姉さん」と一躍に「ひとめぐり」の取材、ライティングも経験し、釧路グラフィックデザインを楽しんでいる。

須藤か志こさん



釧路市在住。釧路工業高等専門学校で電気工学を専攻し、フィンランドへの留学経験も。2017年4月に公立はこで未来大学へ編入。中学時代からFMを通して番組を持つなど、情報発信に積極的。工専では学校初の「女性学生会長」を務め、「クスロ」のイベントに学校の仲間を巻き込んできた。「語り場シンジャー」運営担当。

片野孝亮さん



釧路市生まれ。神奈川県在住。システムアーキテクトで、教員免許も持つ。釧路に仕事で滞在した知人に感想を聞いたら「何もないね」と言われ、「そだよね」としか言えなかった自分に嫌気が。その頃、「クスロ」を知り、しかも高校の同級生である夏廻りさん、名塚さんがぶっ飛んだ活動をしていることに触発され、メンバーに参画。

磯優子さん



釧路市生まれ。母校でもある札幌の美術系大学に事務職員として勤める傍ら、デザインやアートに関わる活動を行う。釧路へのUターンを考えていた際、2015年に「クスロ」のWebに出会い運命を感じ、メールを送り、メンバーに。2017年4月から独立し、札幌市と釧路市を往來する。「クスロ」では主にグラフィックデザインを担当。

名塚ひろさん



「クスロ」副代表。釧路市在住。函館の大学に進学、就職で東京へ。IT企業でデザインなどを手掛けていたが、「クスロ」を始め、2016年6月にUターン。Webやフライヤーの制作、カメラ、グラフィックデザイン、日本語やエゾシカハンターなど、共通言語がまったく違う人たちと会い、東京の友達に自慢したいことが増えた。大学生たちと会い、東京の友達に自慢したいことが増えた。大学生の弟も活動に巻き込んでいる。

夏廻りめぐみさん



「クスロ」代表。釧路市在住。札幌の大学に進学、就職。家業のラーメン屋を手伝うため、2012年に釧路市へUターン。「元気が取り柄」は曲げずに認めるキャラクターポイント。「この人」という釧路人を取柄、撮影してはイラストも添えて紹介している。大学生や高校生とノリが同じ(名塚さん評)で、面倒見もいい「頼れるお姉さん」。

ザリガニ料理ブラザーズにエゾシカハンター……。プロの話に広がる興味と笑顔。

「魅力的な人」をていねいに発信。若者を巻き込むイベントも。

「釧路のことは、もっと素直に発信できる」。IT業界でのデザイン企画を通して「伝える」仕事をしていた名塚さんの目には、現状がもつたいたく映る。活動には情報発信が重要と考へ、市の補助金を得てWebサイトを作った。ユーモラスなイラスト、得意のダジャレを盛り込んだのは、「地元のために何かしたいけど、何をしたらいいかわからない」という人もどき込みやすくする作戦でもある。

「ひとめぐり」の登場人物は多彩だ。「いっぱいいるなら食べちゃおう」と阿寒湖畔のお店で、増え過ぎたザリガニを使ってパスタなどを提供する「ザリガニ料理ブラザーズ」。真っ暗闇の川面を下る「夜カヌー」や「一人ひとりが深く感動するメニュー」を提供する鶴居村のネイチャールガイドの男性、などなど。取材では感動の波が途切れることがない。2年目には「出会った人たちと直接会ってほしい」と、イベントを開催。市内の公園で酒蔵の若旦那を

「新しいリーダーになつてほしい」と名塚

「『若い準備委員メンバー』は、私たちがやってきたようなプレストを繰り返して、成功体験を通して、新しいリーダーになつてほしい」と名塚

「『若い準備委員メンバー』は、私たちがやってきたようなプレストを繰り返して、成功体験を通して、新しいリーダーになつてほしい」と名塚

6 北海道

「クスロ」代表
夏堀めぐみさん
Megumi Natsubori
http://kusuro.com

地域の編集術3か条

地域の魅力を生み出す「人」を見つける。
「熱い手」「魅力的な人」を紹介している私たちの「三方よし」で、みんなが笑顔になる内容にする。

「笑顔になる」三方よしの内容を発信。
「熱い手」「魅力的な人」を紹介している私たちの「三方よし」で、みんなが笑顔になる内容にする。

視点や見方を変えて、おもしろがる。
視点を変えておもしろがる。視点を変えておもしろがる。視点を変えておもしろがる。



「会いに行きたい人」がいる場所だから、何度でも帰って来て、何度でも訪れて。

「会いに行きたい人」がいる場所だから、何度でも帰って来て、何度でも訪れて。

「会いに行きたい人」がいる場所だから、何度でも帰って来て、何度でも訪れて。

ラーメン屋夏堀

夏堀さんの実家で、父が米穀店を改装して1998年からラーメン屋に。現在は2代目店主の兄(写真中央)、旦那様好きな母(左から2人目)など家族と元気のいいお父さんで熱烈接客中、調子ラーメン(醤油味)をはじめ、心も身体も温まるラーメンを作り続けている。身がプリプリのかけうどん、かき揚げもかき揚げ「かきラーメン」も自慢の逸品。海外からのお客様向けに英語メニューもご準備!

調子の熱いポイントや「魅力的な人」の紹介もお任せします!

魚介・豚骨・魚介ダシのあっさりスープが極細細切れからみ、北海道産軟白ネギが山盛りの「ネギラーメン」も人気。

調子マッシュ&リバー

調子マッシュ&リバー

調子マッシュ&リバー

調子マッシュ&リバー

en. shareplace

en. shareplace

en. shareplace

en. shareplace

イッケンヤカレーコモン

イッケンヤカレーコモン

イッケンヤカレーコモン

イッケンヤカレーコモン

くしろでワスツと「い」とめいり

ワスツ港

調子に魅せられて移住した人、家業を継ぐ人、居場所をつくって自分を活かす人。そんな人たちに会って、話してみませんか。

語り場ジンジャー

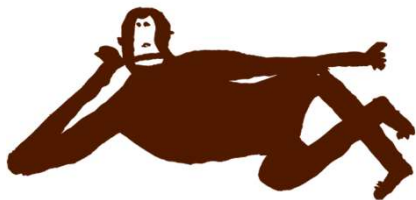
語り場ジンジャー

語り場ジンジャー

語り場ジンジャー

「みかん愛」と「田村愛」で、
関係人口を増やす！

ゴミ、捨てんなよ！





真心込めて
もらってます!

和歌山の温暖な気候によって甘く育ったみかん。温州みかん「田村みかん」は、12月初旬に最盛期を迎える。

みかんの
トップブランド地、
和歌山県有田郡
湯浅町田地区。

一緒に
おもしろいこと
やりましょー!

そこに
人を出迎える、
大きな笑顔が
待っています。

特集
関係人口
入門

THINK LOCAL, THINK PEOPLE

CHAPTER

【関係人口を迎え入れる人】

持ち前のノリのよさと、
楽しくなっちゃう巻き込み力!
榎原正都さんは、
「みかん愛」と「田村愛」の
強さで関係人口を増やす。

1年で延べ100名を超える大学生が足を運ぶ場所となったブランド「田村みかん」の産地、和歌山県・湯浅町田地区。その裏には、みかんの全国消費量減に危機感を覚えた榎原正都さんと仲間のみかん農家の活躍がありました。
photographs by Hiroshi Takaka text by Hiromi Nakano

世帯の半数がみかん農家。
田村はブランドみかんの里。

「田村はおいしいみかんの生育に絶好のロケーションなんです」と笑顔で畑を指差す榎原正都さん。温暖な気候に強く吹き付ける潮風、ストレスがかかるほど果実は甘くなるそう。恵まれた土壌で育った「田村みかん」のブランドは、一般流通の5倍近くの価格で取引されることもある。人口約1000人、250世帯の有田郡湯浅町田地区（以下、「田村」）約半数の120軒がみかん農家だ。「幸美農園5代目園主」の肩書で

母親と共にみかんづ



「幸美農園」の7代目・井上信太郎さん。みかんをつくりながら田村を盛り上げる、榎原さんの心強い味方だ。

「幸美農園」園主・榎原正都さんの
関係人口チャート



くりは携わる榎原さん。おいしいみかんづくりは母親に任せ、今力を入れてるのは農業へのハードルを下げ、田村に関わる人を増やすことだ。「田村みかん」のブランドを売るための営業はしていないんです。むしろ生産が追いつかないくらい需要があつて、一度、みかんや田村を外から見た僕だからこそ、遊軍となつてできることがあると思うんです」

「幸美農園」のみかん畑の前で、広い国内に知られたみかんの味が並ぶ。母親と共に農作業を行う。



●みかん特有の段々畑は古代都市「マチュピチュ」を彷彿させる。●醤油発祥の地でもある湯浅町、風情を感じる「北町通り」の町並みが特徴的だ。2006年に文部科学省によって「重要伝統的建造物群保存地区」に指定された。ふわりと醤油の香りがたたくこの通りにも、Uターンした若者の家が、●醤油の歴史が守る歴史。



消費量の大幅なダウンに衝撃、
10年ぶりに地元へ。
「みかんはもちろん、大好きな『田村』を
盛り上げていきたいんです」



●みかんの輸送はすべて手作業で行う。●「田村」出荷組合はブランドを守るために欠かせない、田村独自の仕組みだ。「組合内では、各農家のみかんの価格が一目で分かり、評価がダイレクトに伝わる。プレッシャーでもあり、高め合いにもなる」と榎原さん。



たわわに実ったみかんを収穫する榎原さん。雨風が直接当たる外側に来ったものほど、甘みが強く出る。やはり畑で食べる採れたてがおいしい。

大きな衝撃でした。「田村みかん」は人気のあるブランドですが、10年後にその人気が約束されているわけではありません。9割近くが専業農家の田村がこのまま衰退していったら……と想像すると恐ろしくて。僕、田村が好きなんです。好きだから何かしなきゃって。「みかんが売れなくなったら地元が衰退していく。今自分がやるべきことは、実家の経営よりもみかん業界全体を底上げすることだ」と気づいた瞬間だった。

幼馴染みの井上信太郎さんは、榎原さんをよく知る協力者だ。実家のみかん農園「善兵衛農園」を継いだのは、榎原さんが地元に戻る半年前。和歌山大学でグリーンツーリズムを学んだ後、2年間農業コーディネーターとしてのノウハウを積んだ井上さん。就農当初から、みかんづくり



湯浅町には、和歌山県内1位のしらす漁獲量を誇る漁港も。新鮮だからこそおいしい「生しらす丼」は、一度は食べておきたい味。

え、中学校を卒業してから話すことがなかった二人が打ち解けたのは、「田村を観光地で終わらせたくない」という共通の思いを持っていたから。「信太郎は僕と比べて人当たりがいいからほんま助かります」と榎原さん。田村を担う遊軍に、参謀役・井上さんの存在は不可欠なのだ。

を持っていなかった榎原さん。たまたまテレビ出演していたみかん好きの大学生が集まるサークル「東大みかん愛好会」のメンバーに興味を持ち、連絡をとるようになり、メンバーと話す中で、みかんの全国消費量が20年前と比較して大幅にダウンしている事実を知った。

に励みながら、県外の大学生をターゲットに田村で農業体験の機会を設けていた。2016年10月、井上さんは「東大みかん愛好会」のメンバーから榎原さんが田村に戻ってきたことを知らされた。間もなくやり取りを始め、二人は再会。田村でやりたいことを語った。幼馴染みとはい

「みかんでつながった、活動を支える心強いパートナー。」
2016年9月、榎原さんは新卒から勤めていた映像制作会社を辞め、東京から地元・田村に戻ってきた。「同世代よりも高い給料をもらい、管理職に就き、このまじや自分が腐っていくんじゃないかと、ふと不安

になったんです。一度患われた立場を失おうと思ひ、新しい経験ができる場所はどこだろうかと考えた末、思い浮かんだのが高校卒業と共に出た田村のことでした」と榎原さんはUターンのきっかけを振り返る。当初、実家の経営を見直し、3か月ほどで田村を出ようと計画していたそうだが、みかんについての知識



●みかん畑の前に並ぶ榎原さんと母・貴美代さん。●みかん畑は肥料がキモとなる。畑間の荷物移動を担う「モノラック」は、乗り物としても楽しい。●収穫の必需品であるカゴ、デザインや形状に各農家の個性が垣間見える。●畑に向かう榎原さんと井上さん。後ろ姿が頼もしい。





●若い農業従事者の多くは、田村で実家のみかん農家を継いだ仲間たち。榎原さん、井上さんと同じ小・中学校を共にした幼馴染みだ。●「今から来れん？」と榎原さんが電話をかけると、次々にトラックで「田村出陣組合」に集合。



右「CHARLL'S」のロゴ。左「四字熟語の「一期一会」をもじった「みかんいちえい」。みかんが出会いをつなぐ足がかり。

盟友・井上信太郎さんとともに、ファンや仲間を増やし、関わりを深めていく！

榎原さんたちの活躍ぶりが頼もしい！



●2017年のみかんの出来について話す榎原さんと井上さん。●「紀家わくわくの外観、築90年と歴史ある物件だ。●井上さん主導で地元の高中生と考えたコンセプト。●『善兵衛農園』の作業場入り口。井上さんが大学生に頼み、一発撮りしてもらったそう。

田村の関係人口、すくすくと育っています！



▲みかんの収穫には少しコツがいる！



▲収穫成功！



▲木の下でひと休み。



▲鍋を囲んで交流します！



▲収穫を終え、ハイチーズ！



▲マイクを握る凛々しい井上さん。

▲「日本みかんサミット」での一役。

まずは田村を知って。農業との関わり方に選択肢を。

田村に戻った榎原さんは、井上さんと共に大学生の受け入れに力を入れた。農業を手伝ってもらったり代わりに、寝る場所と食事を提供するワーキングホリデーだ。拠点は、親戚の空き家を借り、井上さんが地元の友

人とつくった「紀家わくわく」。農業体験に訪れた大学生が交流を持てる場として機能しているが、内輪感が目立って、誰かが住み込むことはしない。近隣住民も集まって交流が生まれるような、公民館的なコミュニティスペースを目指している。「東大みかん愛護会」のメンバーを筆頭に、口コミで田村を訪れた大学生は1年で延べ1000人を超えた。1度で終わらず2度、3度、目的が農業体験から田村に来ることに変わっていく学生もいる。井上さんは「彼らは来るたびに田村をもっと知りたいという。田村での気づきを僕じゃなくて、大学生の言葉で友達にボイスチェンジして伝えてもらいたいです。同じ言葉で言うより生々しくて説得力があるから」と話す。1000人の地区に多くの大学生がいる状況は、住民にとって馴染みがなく初めは不思議がられたという。しかし次第に、「今年はおのり子畑手伝って欲しいのか」と榎原さんたちへ尋ねるようになった。2017年9月には、湯浅町で開催された「日本みかんサミット」の運営を支え、「東大みかん愛護会」の静大みかんクラブの合同夏合宿の受け入れと、立て続けに大きな企画を行った。二人は田村を担う次世代も見据えていた。合宿で田村小学校の児童に向け大学生がみかんの授

業を行う場を設けたのだ。「子どもたちにとって、みかんは当たり前前の存在。みかん好きな大学生がそのよさを改めて伝えることで、子どもたちは田村に誇りを持てます」と榎原さん。

方のプロジェクトに興味を持っていくクリエイターとつながり、人々の興味を柑橘業界に向けたための情報発信を行っている。「みかん農家を営むクリエイターへの憧れと敬意が強く、彼らを照らす役割を担えたらと今は思っています」。農業への関わり方はクラウドファンディングがあっという間。榎原さんの



「ここはプライベートビーチなんです」と二人に紹介された砂浜は自宅から車で5分。「やるしかないでー」と奮気込む二人。

名前の由来は、和歌山の方言で「い」をやる、「い」の意味の「いーやー」に「い」の意味の「いーやー」を意味する「いーやー」を全国的ゲストハウスの共有スペースにみかんを設置し、みかんを手にとってもらう機会を創出す「みかんいちえい」など、一次産業を中心とした和歌山の「もの」を盛り上げるための企画・デザインを行い、榎原さんと和歌山県出身のデザイナー・クボリチサさんが中心となって運営している。

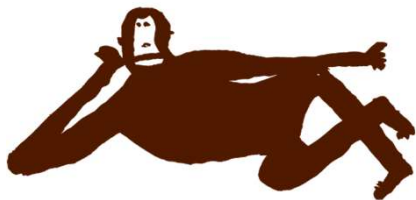
もう一つは、主にクリエイターやデジタルネイティブ世代をターゲットとしたサービスを提供する「CIRKUSIST」(シトラスリスト)。「3C(クリエイティブ・チャレンジ・コミュニティ)」を掲げるこの団体は、柑橘業界に関わる人を増やすことを目的としている。クリエイティブな人材が不足している柑橘業界と、地

榎原さんと一緒に田村で活躍する仲間、井上さんや実家を継いだ若手農家は、みな小・中学校が同じ幼馴染み。仲間と共に、子どものような無邪気さで全力で楽しむ様子は文化祭の準備期間のよう。その輪に飛び込みたくなった時点で、関係人口の仲間入りなんだと思う。

記者が見た関係人口。

まちづくりのきっかけは、
「おやまちプロジェクト」!

ゴミ、捨てんなよ!





「おやまちプロジェクト」は、
こうして生まれた!

東京・渋谷駅から東急電鉄に乗って約20分。尾山台駅前に延びる尾山台商店街を中心に、さまざまな取り組みを行っている「おやまちプロジェクト」。始まりは2016年秋、商店街の将来を案じた「タカノ洋品店」3代目で、尾山台商栄会商店街振興組合理事の高野雄太さんが、近隣にある東京都市大学の地域連携・生涯学習推進室に相談に行ったこと。「毎日16時から18時まで商店街はホコ天になるのですが、そこで大学と一緒に何かできないかと思って」と高野さ

ん。紹介された都市生活学部准教授の坂倉倉介さんは、「私のゼミも15時から18時半。ホコ天でゼミを開けばおもしろいかも」と、翌年4月にゼミ生と商店街にホワイトボードを選び込み、「路上ゼミ」を開催。それが、「おやまちプロジェクト」の発端となった。



右/尾山台商店街のアーチ。100年ほど前から商売が始められ、商店街として発展してきた。左/東急・大井町線の尾山台駅。改札口を出るとすぐに商店街につながる。

で講座を開く、商店街主宰の「尾山台まちなかゼミナール」の開校式で、坂倉さんが「30年後の商店街を考えよう」というテーマでレクチャー。それを聞いた住民が、尾山台小学校校長の渡部理枝さんに「いいレクチャーだった」と報告。関心を持った渡部さんは坂倉さんと会い、活動することに。さらに、尾山台小学校に長女を通わせていた住民で慶應義塾大学教授の神武直彦さんもジョイン。店主、大学教員、小学校校長、住民の4人が発起人となって「おやまちプロジェクト」が動き始めた。どんなイベントを開き、つながりを育てているのか、紹介します!

東京都世田谷区の
尾山台地域。
尾山台商店街に、
楽しい仲間が集まりました!

「おやまちプロジェクト」は、続々進行中!



地域を動かす
ローカルプロジェクト
Project Local

尾山台での暮らしを、もっと豊かに。まち

づくりのきっかけは、「おやまちプロジェクト」!

photographs by Hiroshi Takaoka text by Kentaro Matsui

商店街、大学、小学校、住民がゆるやかなつながりを育み、それぞれの資源を生かしながら、暮らしが豊かになる取り組みを実践している「おやまちプロジェクト」。舞台である東京・世田谷区尾山台地域を訪ねました!



1/夏の「OYAMACHI CAMP」夜は芝居用金魚の駐車場に人工芝を敷き、LEDランタンでキャンプファイヤー。2/足だけ濡かるプール「足プ」。3/テントはみんなで持ち回った。4/新年には「書き初め」も。5/通りがりに書いていく。



つながるホコ天プロジェクト

毎日16時から18時まで歩行者天国になる尾山台商店街。その2時間のなかで、地域の人が顔見知りになり、声をかける間柄になるきっかけをつくらうと、東京都市大学の学生が中心となってキャンプや書き初めなどさまざまなイベントを企画・運営。買い物に来た住民や子どもがイベントに参加し、交流を楽しみながらつながる姿が見られる。



1/親子はもちろん、高齢者や障害者も気軽に集える場づくりを目指している。2/ボランティアスタッフと一緒に4月から正式オープン予定。3/地域の野菜を届けたカレーを提供。4/思いを実現した平福さん。

おやまち子ども食堂

子ども食堂を開きたいと考えていた障害者相談支援専門員の平福恵津子さんは、その思いを「おやまちサロン」で発表。「BARおやまち」でも話を切り出すと、その場にいた女性が「私も手伝いたい」と共鳴。さらに、管理栄養士の資格を生かしたいと別の女性も参加。多くのボランティアのサポートを得て「おやまち子ども食堂」を運営中だ。



おやまちサロン

商店街の端っこにあるピアノ教室&イベントスペース「Fluss（フルス）」では、「おやまちサロン」を開催。運営するのは、デザイナーの黒川成樹さんとピアニストの小松陽子さん。「おやまちサロン」は、講師を招いて話を聞きながら、尾山台でできることをみんなで考える勉強会で、子どもたちの放課後の過ごし方や国連が定めたSDGsなどについて話し合った。



1/高野さんの高校時代からの友人、黒川さんと奥さんの小松さん。2/グループワークの結果を発表。3/住民や大学生がSDGsについて学んだ。4/商店街の空き店舗を借り、実験的に取り組む行状「おやまちベース」。5/セルフバージョンでつくった「Fluss」。

東京都市大学

「おやまちプロジェクト」に参画する、坂倉さんの都市生活学部コミュニティマネジメント研究室と、専任講師の末繁雄一さんの都市プランニング研究室。学生らしい発想で楽しいイベントを開催中だ。「魅力的な店舗ほど商売を続けるのが厳しい状況にあるようですが、学生たちの活動で商店街がより元気になるよう願っています」と末繁さん。



1/末繁さんと娘の花ゆかりちゃん。2/坂倉さんのゼミ生たち「おやまちプロジェクト」で学生パワーを発揮！3/「まちゼミ」開校式で尾山台のこれからをレクチャーする末繁さん。4/ゼミ生と「OYAMACHI CAMP」のイメージを設計。



1/「路上ゼミ」では、学生が探してきた「尾山台」ならではの発表。通りがりの人も耳を傾けた。2/店内で学生たちがミーティング。3/「おやまちサロン」も開催。4/タカノ洋品店。5/左から高野さんと母の奥美恵子さん、著の奥美さん。

タカノ洋品店

学校用品を扱う「タカノ洋品店」。大学生やまちの人たちが集まって、「おやまちプロジェクト」の企画や運営方法を話し合う拠点に。「尾山台が選ばれる地域になるよう、楽しいイベントを企画しています」と高野さん。母の森美恵子さんは、「学生たちが夜遅くまで話し合っているときはおにぎりをつくらう。孫のようにつき合っています」と笑顔。



1/いつまで開いても自由なで気軽に立ち寄れる。2/毎回、尾山台の店舗の一品をつまみに。3/第1回「BARおやまち」では130人以上が出入りした。4/地域のワインセラー。「八幡屋蔵部」も。5/武田さん（左）と高野さん、坂倉さん。

BARおやまち

商店街のワインマーケット「八幡屋蔵部」で、月1回開催される「BARおやまち」。「おやまちプロジェクト」に関わってもらいたい人を気軽に誘い、ゆるやかなネットワーキングが生まれることを期待するイベントだ。店主の武田智之さんは、「普段は知り合えない人たちが一緒にワインを飲み、会話を楽しむことで、つながりが広がっています」と話す。

「おやまちプロジェクト」、垣根を越えて広がっています！

オッポンも注目してるぞ！

尾山台公式マスコットの「尾山オッポン」



1/ワークショップでまちの歴史を実感した小学生と都市大生、履徳大生。2/ワークショップは小学校の図書室で開催。3/尾山台小学校。4/右から神武さん、学校支援コーディネーターの石原望江さん、渡部さん。

おやまちデザインプロジェクト

地域の人が尾山台の未来を考え、行動するプロジェクト。例えば、「おやまち今昔写真のワークショップ」では、地域のお年寄りが昔の尾山台の写真を持ち寄り、大学生や子どもたちに歴史を語った。その写真を手にまちを歩いて現在と比較。「世代を超えて対話を楽しめました」と神武さん。校長の渡部さんも、「教室では得られない体験」と喜ぶ。



遠い私立に通う小学生に、
尾山台の友達ができたい！

坂倉 「おやまちプロジェクト」が
スタートして1年半。高野さんの的
に「ぼんぼん」出たか？

高野 ジュンくんです。名古屋から
尾山台に引っ越してこられたご家族
の1年生の男の子。離れた私立の小
学校に通っているのが「OYAMA
CHI CAMP」です。お母さんが「OYAMA
CHI CAMP」で出たとき、「僕も入りたい」
と、そこで都市大
生やうちの家族と親しくなり、息子
を通じて尾山台小学校の友達もでき
ました。お母さんは、「ジュンがホコ
天に来るのを楽しみにして」と喜
んでくださっているばかりか、今や
「ホコ天」のスタッフのように手伝
つてくださっています。

坂倉 私は「OYAMACHI CAM
P」の夜、ネットで寝たら、夜中
の時間に突然、「何やっているん
ですか？」と声をかけてきた女性が
いました。夜中だったのに連絡先を
渡すと後日、「尾山台に住んで1年
が経ちますが、知り合いがいなく
て」という手紙が届いたんです。で
高野さんと3人で飲みに。
高野 行きました（笑）。

坂倉 普通に暮らしていてもまぢの
人と知り合う機会って意外と少な
い。だから、気軽に顔見知りになら
な場所をつくろうという話になり、始
めたのが「BARおやまち」。

高野 尾山台のお店の一品をワイン
のつまみに出せば、お店の紹介もで
きる。1品食べれば、知らないお店
でも買に行きやすくなりますから。



坂倉 何がきっかけで新しいことが
始まるのかわからない偶発性も「お
やまちプロジェクト」の魅力。その
ためにも、いろいろな立場の人が気
軽に参加でき、つながれる状況をつ
くるのが大事だと考えています。

坂倉 普通の暮らしから学ばないで
は、手前味噌ですが、新潟出身の祖
父が戦後、東京へ出てきて、尾山台
で洋品店を始めた。だから、おやま
ちで持続しているのも先人たちの
努力の結果。僕のやりかたは、
既存の組織をつなぎ直し、組織外
の人を誘いながら、未来に向けた商店
街をつくっていくこと。その装置と
して「おやまちプロジェクト」があ



ゼミ生の田中利枝さん。「みんなが夢を応援して、実現できる尾山台になればいいな」。



誰もがやりたいことを、
実現しやすい地域になるように。

上/取材した日は「おやまちベース」のオープ
ン日。お祝いにとホコ天で餅つきを行った。中
右/子どもが書いた「おもちつき」の看板。中左/
「お餅、ついていきませんか」の呼び声につら
れて、通りがかりの住民が餅つきをした。下/
ついた餅はまちの人に振る舞われた。

107

おやまちプロジェクト

発起人の坂倉杏介さんに聞きました！
ローカルプロジェクトを
動かしていくコツは？
とにかくやってみること。その手戻りから次の一歩を
みんなで作ろう。メンバーの持ち味を大事にし、人と人
をつなげるコミュニティマネージャーの視点を持つこと。

DATA
活動団体名「おやまちプロジェクト」
スタート年「2017年」
<http://oyamachi.org>



上/尾山台商店街は「ハッピーロード」の愛称で呼ば
れ、地域住民から親しまれている。下/1920年代から
店が建ち始め、49年に尾山台商栄会が発足。現在は空
き店舗が順番待ちになるほどの人気の商店街として賑
わっている。

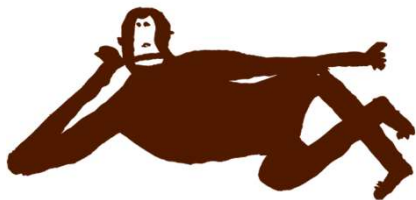


坂倉杏介さん × 高野雄太さん。
「おやまちプロジェクト」の
いまとこれから。

みんな、
つながれ〜!

『裏山しいちゃん』と、 愉快的プロジェクトたち

ゴミ、捨てんなよ!





赤い丸屋根が印象的なJR飯田駅。飯田の名産・リンゴがモチーフに、ここまで来れば『裏山しいちゃん』はすぐそこ！

「裏山しいちゃん」に来る、
内発性を持った若者たち。

長野県飯田市のJR飯田駅から歩いて5分ほどの元町交差点の角に、ちよつと変わったスペースがある。2階建ての古い建物をリノベーションし、2017年4月にオープンした「裏山しいちゃん」だ。運営するデザイン会社「週休いつか」の代表取締役社長・新海健太郎さんが「どうぞ」と引き戸を開けて、中へ案内してくれる。「週休いつか」のオフィスも1階に入っているそうだが、まず目に飛び込んできたのは棚に並んだたくさんのお菓子と駄菓子。「くまのこしよてん」という会員制の貸本屋を営んでいます。駄菓子は高校生が販売しています」とのこと。2階へ上がると、カラフルに装飾されたスペースが。「ここはレンタルス

ペースで、コワーキングとしても使えます。数人の女性が作業していたので声をかけると、「大丈夫ですよ」と取材に応じてくれた。

水引作家の白子加菜さんは、水引の雑貨やアクセサリーなどをポップな感覚でつくっている。「たまたまカフェで新海さんと出会う、飯田市出身のヘアメイクアップ・アーティストの小椋ケンイチさんと「水引御殿」という飯田の水引を盛り上げるプロジェクトを「裏山しいちゃん」でされていると知り、来るようになりました。水引は飯田の伝統工芸ですが、日常的に水引を楽しんでほしいと思って活動しています」と話す。Webデザイナーの奥山理香さんは、「裏山しいちゃん」をコワーキングスペースとして使っている。「週休いつか」からデザインの仕事を受託しながら、「最近自分

project
108
裏山しいちゃん
長野県



代表の新海健太郎さんに聞きました！

これからプロジェクトを始める人へ一言！
「見切り発車」でいいので始めましょう。発車後に知見を積んで、修正を要すれば、いいプロジェクトになっていきます。

DATA 活動団体名/週休いつか スタート年/2017年 スタッフ数/11名 www.itsuka.co.jp

「裏山しいちゃん」と、 愉快的プロジェクトたち。

「週休いつか」の
新海健太郎さんのアプローチ。

「裏山しいちゃん」に「山羊印カフェ」・「爆発芸術舎」に「桜咲造」。
なんだかわかったネーミングの「場」が次々と広がっている長野県飯田市。
愉快的プロジェクトたちが、「何もなし」と揶揄される地域を盛り上げています！

Photographs by Hiroshi Tanaka text by Kenmao Matsui

特集
地域と関わる
ローカルプロジェクト
PROJECT LOCAL!

地域の高校生、水引作家、ノマドワーカー、劇団員、長野県飯田市にある「裏山しいちゃん」には、ユニークな人が大勢訪れる！



長野県飯田市。
集まった人が次々と輝く、
ローカルプロジェクトの
玉手箱です！

「週休いつか」
代表取締役社長の
新海健太郎さん

アイランドの良方
108プロジェクトの良方
108プロジェクトの良方
108プロジェクトの良方
108プロジェクトの良方



思いもよらない
アイデアと、
仲間が生まれる空間。

レンタルスペースにたくさんの方が集まった。地域の人たちの世代を超えた交流と新しい何か生まれる場に。



集う人の
内発性が
連鎖してます！

- 華平神社の敷地内に立つ「裏山しいちゃん」● 資本屋「くまのこよへん」を会場にすれば1冊80円で借りられる。
- 子どもたちは駄菓子が人気！ ● ママさんの赤ちゃんヨガやコスプレイヤーの撮影会など多彩な使い方ができるレンタルスペース。500円で貸し切りもOK。



ADDRESS
裏山しいちゃん
長野県飯田市元町5455-2 tel.0265-49-8948
www.facebook.com/41chyz



問わる人からひと言
美奈さんに誘われて通りより
になりました。僕もイラストレ
ーターになるのが夢で、「週
休いつか」の社員の方から
パソコンの使い方、デザイン
や広告の仕事についても教
わっています。



問わる人からひと言
新潟さんから地理学を教わ
ったり、「平成の成金丸」とい
う人材教育プロジェクトのイ
ンターネット会議を行ったり
。いつか、大人も交えた意
見交換会や講演会も聞いて
みたいです。



問わる人からひと言
駄菓子のネットでの仕入れ、
販売、売り上げの計算を指
導しています。小学生の穴
場的な店として人気です。思
った以上に売れてきて「(笑)、
地域のお祭りの日には
1日で1万円超えです！



問わる人からひと言
「PUSH!!」という高校生向
け情報誌の記者をしています
。ただ、その仕事はあま
りここではなくて、学校の勉
励をしたり、履をとったり、
部活がない日はとりあえず
います。



地域の高校生も足繁く通います！

僕が実証していますから」と笑う。
今後は、「裏山しいちゃん」的な
場を地域の企業のなかにも設けたい
と構想を練る新海さん。とくに高校
生と地元企業が関わる場をつくり、

飯田の魅力リアルに感じ取ってほ
しいと、「進学で約7割が地域外
へ出て、戻ってくるのは3割程度。
その数値を上げるのも地域の課題で
す」と飯田の未来を思い描く。

そうに読み聞かせるといった演劇と
本を絡めたイベントを開催している。
「東京からUターンしたとき、飯田
にこんなところがあったのかと驚き
ました。つい足を運びたくもな場所
です」と笑顔。「いつか上演もした
いです」と戯曲を書く市瀬佳子さん
も気に入っている様子だ。
駅から近いので、通りがかった地
域の人たちが「こんにちは」と気軽
に立ち寄る。夕方には4人の高校生
が引き戸を開けて入ってきた。それ

「卒業後は都会の学校へ進学し、イ
ラストレターになりたいです。で
も、いずれは飯田へ戻って恩返しし
たいです」と地域への思いを語った。
もともと起業支援の場として立ち
上げた「裏山しいちゃん」。「やりた
いことを実現する場になれば」と新
海さんは言う。そのために大切な
は「心からやりたいという内発性」
とも、「内発的な視点で地域資源を
掘り起こせば、何もないと揶揄され
る飯田の暮らしも楽しくなります。



新海さんが取締役を務める「きまじめ」が
つくる「月刊まじめ」。飯田市でちびん
の発行部数誇る情報誌。



高校生向け情報誌「PUSH!!」の創刊準
備号。高校生記者は、作業場として「裏
山しいちゃん」が使える特典も。

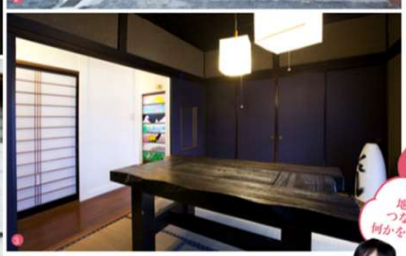
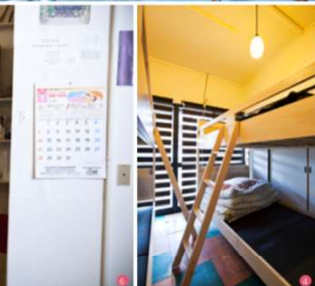
りたいこと、アフィリエイトですが、
そちらに重点を置いて取り組んでい
ます」と話す。「ただ、ノートPCで
自分の作業をしながら、子どもたち
に駄菓子も売りますし、本の貸し出
しも行います。その店番代も「これ
くらいかな？」と請求書に加えて出
しています」と笑顔で答えてくれた。
レンタルスペースを劇団の稽古場
として使っている清水ゆかりさんは
稽古とは別に、「肉と本しみず」と
いう料理本のレシピを、さもおし

どれ違う高校に通い、「裏山しいち
ちゃん」で知り合った。駄菓子を販売
する飯田OIDE長船高校2年の
中嶋美奈さんは、「商業科の地域人教
育というカリキュラムの地域企業の
インターンシップで「週休いつか」
にお世話になり、そのときに「裏山
しいちゃん」を知り、通っています
。」と話す。将来の夢はイラストレ
ーター。新海さんに誘われ、学校帰
りや休日「週休いつか」の社員に
パソコンの使い方を教わっている。

開く人からひと言
開館市のゲストハウスに泊まり、旅行が和やかにディスプレイしてあったのを目にした。「桜咲造」の近所の方が繁りの神輿を担がせてくれたのいい思い出です。



鎌倉明也さん
●「桜咲造」のシェアスペース。●以前は電器屋さんだった。●和室もある。●宿泊も可能。●「エース・リフォーム」代表取締役の太谷公昭さん。●地域貢献する大人になってほしい」と高校生にエールを送る。●イベントの準備に来た鎌倉さんの後輩たち。●受験勉強に励む飯田高校の3年生。



CHECK POINT!
地域とつながり、何かを生む場!

ADDRESS
桜咲造
長野県飯田市上郷黒田379-4 tel.070-3163-5125
https://m.facebook.com/sakurasakuzou



開く人からひと言
学校がインパクトする場になっているので、子どもの絵画教室では思う存分アウトプットしよう! 絵や造形を通して、目標へ向けたプロセスの大切さや自分で何かをつくる力を養ってほしいです。



ADDRESS
爆発芸術舎
長野県飯田市今宮町1-33 tel.0265-49-8948 https://m.facebook.com/bakugei



CHECK POINT!
美術教室が少ない飯田の貴重な場です!



『桜咲造』に『爆発芸術舎』。自ら関わる人が増え、まちにインパクトを広げます。



CHECK POINT!
僕が地域と関わり始めたきっかけの場!

開く人からひと言
「山羊印カフェ」で働いています。シェアカフェなのでスタッフもお客様も個性豊かな方が多く、そんな方々とつながることが楽しくて、私たちのアイデアが店で実現できるのも刺激になります!

ADDRESS
山羊印カフェ
長野県飯田市高羽町1-8-1 カフェ狐内 tel.0265-48-5040 http://yagin.net



●月曜はカレーが人気の「山羊印カフェ」、火・水曜は自家焙煎コーヒーの「喜格社」、木曜は「カフェ狐」、物販として『あわい』の菓子工房とアフリカ雑貨の『Biba』が入っています。●山羊印スパイスを使ったネーブルカレー。●まろやかな味のチャイ。

「後輩に受け継がれたことが、『桜咲造』の大きな成果!」
「裏山いちまん」をつくる前から、新海さんはさまざまなアプローチで地域を盛り上げてきた。12年にオープンした「山羊印カフェ」は、「以前は天然酵母のパン屋さんで、会社勤めをしていた頃、よくランチを食べに来ていました。……けど、ある日突然、閉店しちゃって」と新海さん。お気に入りの場所をなんとか残したいと考え、仲間とカフェを開くことに。「シェアカフェという言葉も知らず、ただ残したい一心で仲間と協

16年に開設したシェアスペース「桜咲造」の生みの親は、飯田O.I.D E長姫高校2年生だった鎌倉明也さん。鎌倉さんは「飯田にゲストハウスをつくりたい」と、新海さんに飯田市ビジネスプランコンペティションへの応募のためのサポートを頼み出した。放課後に「週休1つか」を訪ね、新海さんの指導を受けながら事業計画書づくりの没頭。オフィスで徹夜し、そのまま学校へ行くこともあった。数か月かけて事業計画書を書きまとめた。コンペに挑んだものの、結果は奨励賞に終わった。
ただ、そのプランにリフォーム会社「エース・リフォーム」が賛同。改装工事を行い、「桜咲造」が誕生した。鎌倉さんは地域の大人を講師に招き、仕事や人生を語り合う「さくさく講話」を開くなど、高校生が地域と関わる場づくりに努めた。社会人になった鎌倉さんはこう振り返る。「実は「桜咲造」が高校生の遊び場になるだけではなく、地元の方々がいられた。でも、新海さんと一緒に意義を熱心に説明するとご理解いただけ、さらにその方が「さくさく講話」にも登壇してくださったことが何よりもうれしかったです」
今、「桜咲造」は鎌倉さんの後輩が運営する。「それが大きな成果」と新海さんは、イベントの準備に来た後輩を頼もしそうに眺めていた。

地域と関係人口の つながりの創出の視点

1. 関わりしろ
2. 弱さの交換
3. おしゃれな生存確認

ご清聴
ありがとうございました。
最新号は好評発売中！
特集「おすすめの
ホステル」

ソーシャル&エコ・マガジン いつかは泊ってみたい!「おすすめのホステル」の大特集!

ソトコト

No. 252
9
SOTOKOTO
September 2020
1019YEN

初めての
ホステル
HOSTEL

Social Hostel Guide

大好評!

ソトコトOnline
sotokoto-online.jp



アクセスは
こちらから



ほくらの
とっておき
ホステル・
ガイド

ソーシャル&エコ・マガジン

未来をつくる仲間が増えています!

ソトコト

ありがとう20周年!!

20祝



ゴミ、捨てんなよ!



ゴミ、捨てんなよ!

